

・人の世にめでたし朝の日をうけて
すきことほる葉の青きかがやき

・山の上にたでりて久しう吾もまた一
本の木の心地するかも

『常磐木』

春ここに生るる朝の日をうけて山

河草木みな光あり

『豊旗雲』

あらゆる感動のうちで、物をめづる心は最も切である。しかして、めづる心の最も切なる、人をおもふ思に歌ははじまる。（中略）風物自然の歌は、山川草木、鳥獸虫魚をめづる心が、^{おのづか}「自らにこれを成すのである」このように信綱は、歌の源として何よりも「愛づる心」をおいた。信綱の秀歌に、

なおやや余談となるがここで佐佐木家について調べてみると、信綱には、妻雪子の家を継いだ長男と0歳で亡くなつた三男を除くと、二男五女の子どもがいた。そしてそのうち歌を詠んだのは、末子の治綱のみであつた。また孫は十七人いたが、そ

と回想している。二・二六事件は結果的に日本の軍国主義化につながつたものであり、別に信綱も濶の行動自体を是としていたわけではなかつただろう。しかし獄中にあつてあまり人が近づこうとしない古くからの弟子を再三見舞つたのは、やはり信綱が「愛づる心」を実践したからだと思うのである。

藤瀬君を思うて、「大洗にやどつた。斎

ここで歌を詠んだのは治綱の子の幸綱のみであった。そして曾孫は三十七人となるが、今のところ歌を詠んでいるのは三人という状態である。なほお孫、曾孫とも銀行などの勤め人や理系の者もけつこういるが、孫で五十九%）教師がいるので、教育関係が多い家系とは言えるかも知れない。

(二) 弟子の回想から

次	
寄稿 「佐佐木信綱と愛づる心」	大野道夫
記念館ニユース 「平成十七年度特別展報告	ほか
特集 「一葉と緑雨と信綱の交わり」	磯上知里
「雜考—歌の命」	信綱一首(二十)
寄稿 「追憶」	3
久保田利秋	4

佐佐木信綱と愛づる心

愛め
づる心

佐佐木信綱と愛づる心
大野道夫
一 歌の源として
の愛づる心

うたつた歌が多いのも、このことをあらわしている、といえるだろう。

次	
寄稿 「佐佐木信綱と愛づる心」	大野道夫
記念館ニユース 「平成十七年度特別展報告	ほか
特集 「一葉と緑雨と信綱の交わり」	磯上知里
「雜考—歌の命」	信綱一首(二十)
寄稿 「追憶」	3
久保田利秋	4

平成18年3

佐佐木信綱記念館だより

歌は、三十一文字に魂を宿す心の声であつて、歌を志す人の思いは熱く、汎用で、歌の中味は決して軽々しいものではない。歌には、心の趣くまゝに身軽でスマートな歌もあれば、推敲に推敲を重ねた重々しい歌もある。情景豊かな歌もあれば、喜びや、心の嘆きが滲み出る歌もある。歌は、人の心の中に生まれ、生き、その価は人の心の中で育まれていく。その意味で歌は、人の心の分身であり、清く高い志も、深く熱い心も、燃えたぎる思いも、胸の底に沈む沈痛の情も歌に託して伝えることがで、きるのである。また、歌はその心の在り様によつて、その容姿を変易させることのであり、その伝わり方も異なる。

信綱が生涯に詠んだ一万首以上の歌の中で、私の心に残る歌として、おしこりおしもみ鯉の上に鯉投げし魅の一つを囲みかたまり寄りがある。鯉の動きが手に取るようになつた。

これは奇しくも俳人松尾芭蕉も、草いろいろおの花の手柄かなと生命と個の大切さを詠んでいる。巨匠の見る共通の人間像として心に残る一首、一句となつてゐる。

花ききみのらむは知らずいつくしみ
猶もちいつく夢のこのみ木実を
よくみれば齊花さく垣ねかな

も共に両者の作品であつて、人を育む育ての原点として、私にとつて忘れられないものとなつてゐる。これらの歌は、過去からのメッセージであり、自らのメッセージであり、又、未来へのメッセージでもある。

かくして歌は、時を越え、時と共に歩み、その命は不滅であつて、今なお新しいものを生き生きと語りかけてくるものがある。

これからも大いに耳を傾けてみたいと思つてゐる。

先生の講演を聞きに行きました。まず、先生の紹介があり、それから話が始まりました。先生の話は、歌の道の事、万葉集の事、故郷の事、そして、自分の両親のこと今まで及びました。先生はその時、七十九歳であつたと 思います。

(元教員)

久間田中学に属職し、三年がたつた頃の事でした。ふと新聞を見ると、故郷・石薬師に佐佐木信綱先生が帰つてくるという記事が、目に飛び入りました。故弘綱先生の六十年祭に御出席の由、この際、私達の為に講演があるという事も書いてありました。

私はかねてより隣村であり、立派な万葉学者が石薬師生まれである事を承知していました。学生の頃、万葉集の勉強をした事があり、この報せには心ならずもよろこび、飛び上がる思いでした。

それから何年か後、佐佐木信綱記念館で会が催されました。その中に、かつて信綱先生の秘書をされていた村田邦夫先生がおみえになり、昔の話をいたしましたら、「その時の力バン持ちは私でした」と、おっしゃられました。そこで又、非常に懐かしく感じ、信綱先生の故郷を愛される心の深さを思い起こしました。

私は弘綱先生、信綱先生の短冊や書を持っていますが、事ある毎に出しては、何とか深い意味を汲み取るうと思い続けております。よい先生が生まれたわが故郷は、「いいなあ

歌の命

石みな石のおのづからなる

寄稿

らい泣きをしながら、しんみりとお開きへ

